

「言葉にできる人」の話し方 齋藤 孝

「あの人、独特な存在感ありますよね」と言うと、言葉の意味するところとしては何も言っていないけれど、何か大切なことを言っているようには聞こえます。——会話で間に合わせるテクニック。意味は空疎だが、その場は埋められる。

「言葉にできない」

「うまく（言葉で）伝えられない」

という悩みをもつ人は多いのではないのでしょうか。

ここでいう「言葉にできる」とは、相手を納得させられることが言えること、を指します。

「言葉にできない人」は、往々にして相手から「考えていないな」と思われたり、場を気まずくさせたりしてしまいがちです。

この問題を解決するためには、「言葉にできる（＝伝えられる）」ことと「知識がある（＝考えている、知っている）」ことを分けて考える必要があります。

編集力を語る際に外せないのが、松岡正剛さんが監修した『情報の歴史』（編集工学研究所）という本。松岡さんは、情報の編集ということをずっと言われている方です。『情報の歴史』は一九九〇年に出版された本で、特筆すべきは「日本」と「世界」の「情報に関する歴史」を「並行して記した年表」をつくったということ。

何年に日本で何が起こって、同時に世界ではどんな出来事があったか、情報に関するすべての事柄が一見してわかるようになっていきます。これはまさに「情報を年表という形で編集したもの」です。

アマレス（アマチュアレスリング）とプロレス（プロレスリング）の違いは何かというと、アマレスは、相手に勝つことが最優先で、そのために、相手のよさを消すことが必須。相手の得意技を出させないようにするのがアマチュアのレスリングなんですね。

一方プロレスは、相手のよさを徹底的に引き出し合う競技。ですから、あえて技を受ける。技をかけられるとわかっていて受けるのがプロレスです。

「そんなの、わざとかけられでいるんだらう」と言うのは、プロレスを何もわかってない人の意見。得意技をお互いに引き出し合って成立させる。そのダメージに耐えるのが、プロレスの醍醐味なのです。

つまり、勝ち負けではなく、それ以上に互いの魅力を引き出し合うのがプロレスである。

人と比べて自分の方が詳しいとか知的であると誇る必要はなくて、いろんな見方を知っ

て、それを人と共有できるのが楽しいと思えばいいと思うのです。

目指すのは、自分自身の知識のあり方です。重箱の隅をつつくようなことばかりを集めて一人で悦に入ったり、「こんなこと知ってるぞ」とひけらかしたりするための知識ではなく、どんどんアウトプットすることを楽しみながら自分の中に定着させる知識を増やしていく。

「何それ、何それ、何それ」と言って彼らに教えてもらえばいいのです。どんな話題でも、知っていて損することはありません。雑学は邪魔になりませんから。私には、「何それ」作戦で学生たちから得た情報がたくさんあります。

「存在感」にも通じるところですが、「〇〇感」という言葉はとても便利で、間に合いやすい言葉です。「〇〇感」は、自分の感覚を伝える言葉。他の人はどう感じるかわからなけれど、自分はこう感じている、という表明です。

そういうときは「質感がいいね」という表現をおすすめします。「重厚感」でもいいです。これらは、物全般に使えます。お茶碗やコップ、紙や服、壁や床、手で触れられるものならどんなものでも使えます。

「いいね」「かわいいね」「すてきだね」だけでは、相手からしたら隔靴搔痒です。もう一言、何か言ってほしい気持ちになります。

前出した「存在感」と組み合わせで、「あの人、独特な存在感ありますよね」と言うと、言葉の意味するところとしては何も言っていないけれど、何か大切なことを言っているようには聞こえます。どう表現していいかわからないとき、人については「独特な存在感」、物については「独特な〇〇」と言うと、たいいていのことは間に合います。

私は、おすすめの本を聞かれたときのために、ジャンル別に回答を用意しています。時代小説なら藤沢周平の『草しぐれ』（文春文庫）、子ども向けなら夏目漱石の『坊っちゃん』（文春文庫など）など、これは外せないというものをあらかじめ準備するようにしています。

もっと細かくおすすめする場合は、例えばミステリー小説の中でも、語り手に引き込まれるのはジェームズ・M・ケインの『カクテル・ウエイトレス』（新潮文庫）、変わったキャラクターならウィングフィールドの『フロスト警部』シリーズ（創元推理文庫）、笑いだったらドナルド・E・ウエストレイクの『ドートマンダー』シリーズ（角川文庫など）とい

うふうに、内容によっておすすめを挙げています。

世の中にあるすべての本の中からおすすめを選ぶのは大変でも、ジャンルに分けたり目的に分けたりして細分化すれば挙げることはできます。

「答えられない」ではなく、「こういう答え方ならできる」という回答をする、これが間に合う会話です。

知識を定着させる方法として、暗唱のほかに要約があります。暗唱はそのまま暗記することですが、要約は要点を押さえるということ。

・・・

要約の“肩慣らし”として、「縮約」を試してみるといいと思います。縮約とは、もともと使われている言葉だけを使って字数を短くして要点をまとめるということ。このときに、自分の言葉を一切足さないのがポイントです。二〇〇字くらいの新聞記事だったら、四分の一の五〇字に縮約してみる。そのプロセスには、言葉を削る作業が必要になってきます。

やり方として、まずはざっと半分の一〇〇字に縮めます。それから「この言葉はなくても意味が通じる」とか「この形容詞はいらない」というふうに、八〇字、七〇字……と削っていきます。縮約に慣れてくると、必要な言葉と不要な言葉の区別がつくようになるので、ぜひやってみてください。

要約して話す訓練をすると、短い時間で意味のある会話ができるようになります。

「過ちて改めざる、是を過ちという」という言葉がありますが、これは「間違いをおかし、それを改めないことが間違いなのだ」という意味で、ビジネスでも人生でも通用する言葉です。

一方で『カラマーゾフの兄弟』のような小説は、時代状況もまったく異なるので、引きつけるのが難しいものです。大学の授業では、あえてこの『カラマーゾフの兄弟』を取り上げってみました。

一度も読んだことのない学生たちに、はじめから物語全部を理解してもらおうと思っても無理です。そこで考えたのは、まったく自分たちとは遠いところにあると思っている『カラマーゾフの兄弟』という作品の一場面について、「わかるわかる」と共感してもらうこと。それを端緒に、作品に興味をもってもらうと考えたのです。

主人公のアリョーシャは、とても人柄のいい青年で、第二のイエス・キリストになるかというほど素晴らしい人物です。アリョーシャの尊敬するゾシマという長老は、聖人と崇められていた人なのですが、ゾシマが亡くなったときに遺体から腐臭を発していて、アリョーシャは混乱します。

聖人なら腐臭を発しないはずなのに、腐臭を発するという事は、ゾシマは聖人ではなかったのか……と。街中の人たちも混乱し、迷い悩む中でアリョーシャは大地に突っ伏して倒れます。そして、立ち上がったときには確固たる信念をもった闘士に変わってしまし

た。それまで悩み多き青年だったアリョーシャは、強い意志をもつ人間になっていたのです。

この場面を学生たちに説明して、この場面の“意味”、迷いや悩みがある伏せた状態から、起き上がることによって意識が変わるという“ビフォア・アフター”の体験を思い出してもらいました。そして、その場面を全員が演じます。

ある学生は、ピアノの演奏会の前にまったく自信がなくて落ち込んでいる状態から、実際に演奏会に出てみたらうまくできて自信がついたという変化を演じてくれました。

別の学生は、大学入試の前日に緊張して具合が悪くなったけれど、当日思い切って家を出て会場に行ったら、思いのほかリラックスして試験を受けられて合格した、という変化を演じてくれました。

たった一つのシーンですが、アリョーシャと自分を重ね合わせて、実際に伏せた状態から起き上がる演技をすると、それまでまったく遠い存在だったアリョーシャにシンパシーを感じるようになり、『カラマーゾフの兄弟』が一気に近しいものになっていくのです。

一見関連のないような言葉三つをつなげて文章にするというのが「三題噺（さんだいばなし）」。

例えば、こんな問題。

- ・「ポケモン」 「火事」 「空耳」
- ・「青」 「美術館」 「いぶりがっこ」
- ・「背伸び」 「牛乳」 「ボタン」